

重点取組分野	令和 元 年度		総括	重点取組分野	令和 2 年度		総括	重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくのかを明らかにする。②1時間毎の課題を明確にし、知識・技能の定着を図る学習活動の充実と、学習の振り返りを行う授業を推進し、子どもにどんな力が身に付いたかを明らかにする。	①2学級規模の良さをいかし、日々の学年研や児童理解共有を深めながら学習計画を立てることができた。②毎時間の学習内容の理解と、その定着には課題が残った。基礎的な知識・技能の定着には、さらなる時間の確保が必要と考える。カリマネの見直しが必要。	A	確かな学力	①「主体的に学び合う」子の姿を具体化するために、児童の実態を具体的にとらえ、授業後の求める具体的な子どもの姿を描いていたを検証していく。②ゴールから授業づくりをしていき、主体的に学び合うための手立てを毎時間行っていくことを大切に授業づくりを行う。	①コロナ禍にあって、「主体的に学び合う」ための、グループ活動や話し合い活動があまりできなかったため、具体的に迫ることが困難だった。②重点研究の成果として授業のゴールを明確に学習内容および評価計画を組み立てた。課題となるのはその授業実践。	B	確かな学力			
豊かな心	①なかよし班活動などで一人ひとり、また互いの関わりを大切に集団活動や体験的な活動の充実を図る。②「特別の教科 道徳」では、研究で取り組んだ、子どもが自分自身の問題としてとらえ、向き合うために必要な指導方法や評価の在り方、教材の効果的な活用方法等を共有する。	①行事や毎月のなかよし給食・遊び、なかよし集会などで、互いの関わりを大切に集団活動や体験的な活動の充実を図ることが出来た。②前年度の研究成果から、各クラスの道徳の授業に生かそうとすることが出来た。全体としての共有はできなかった。	A	豊かな心	①なかよし班活動などで一人ひとり、また互いの関わりを大切に集団活動や体験的な活動の充実を図る。②「特別の教科 道徳」では、道徳的な諸価値についての理解を基に子どもが自分自身の問題としてとらえ、向き合えるような授業づくりを行う。	①コロナ禍で、異学年交流活動が制限され、なかよし班活動を行うことは困難であったが、zoomを使用してなかよし班の顔合わせを行った。②子どもが自分ごととして、向き合えるような授業づくりを意識して行い、その結果自他を大切にす心情や態度を育成した。	A	豊かな心			
健やかな体	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくのかを明らかにする。②運動の楽しさや喜びを味わえるよう、授業の充実を図り、主体的に運動するきっかけづくりのために職員研修を行う。③食の自己管理ができる児童育成の向け、実態に応じた食育の取組を推進する。	①②授業中の運動をどのように行っていくのか、動きの中でどこがポイントなのか、担任と体育部と情報交換を行った。③食事の重要性や感謝の心を育てるための活動を給食委員会を中心に行なった。残食は減ってきたが、個別に課題が必要な子への支援は不十分。	B	健やかな体	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくのかを明らかにする。②運動の楽しさや喜びを味わえるよう、授業の充実を図り、主体的に運動するきっかけづくりのために学年の枠を超えた教材研究を行う。③食の自己管理ができる児童育成に向け、実態に応じた食育の取組を推進する。	①②コロナ禍で、子どもの体力が低下している中、どのように体育の授業を進めるのか、情報の共有があまりできなかった。コロナだからできないのではなく、できる運動をしようという前向きに考えることはできていた。③給食で一人一配膳となったことで、食べる量に目を向ける教師の声掛けが増えた。	B	健やかな体			
特別支援教育	①児童への対応の仕方等でケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②学習に困り感のある児童の取り出し授業を行う。③個別支援学級の児童が一般学級の学習や行事等に参加できるよう、交流の意義を明らかにし、保護者との連携を密に行う。	①必要に応じ、ケース会議を行い特総等外部機関にも積極的に、繋いだ。②算数のコース別学習で、困り感のある児童への支援を行った。他教科の支援等の課題が残る。③交流学級の担任、保護者との連絡を密にとり、児童の実態に合わせて計画的に交流学習を行った。	B	特別支援教育	①配慮の必要な児童への対応が全職員で行えるように、情報を共有していく。必要に応じケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②学習に困り感のある児童に特別支援教室を行う。③個別支援学級の担任、交流級の担任が連絡を密にとり、児童の実態に合わせて計画的に交流学習を行った。	①配慮の必要な児童の情報を共有し全職員で対応した。必要に応じケース会議を行い特総等外部機関に繋いだ。②きめ細かい支援をするために特別支援教室を開設した。③特別支援学級担任、交流級担任が連絡を密にとり、児童の実態に合わせて計画的に交流学習を行った。	A	特別支援教育			
児童生徒指導	①職員間で「指導のスタンダード」を共有し、ぶれない指導をしていく。②「さわの里モラル」への意識を高め、毎月の生活目標と重ねた指導をしていく。③毎月の会議で、「児童理解」の時間を設け、児童の実態把握に努め、指導の具体を検討し、全職員で指導に当たる。	①スタンダードの共有を図り、必要に応じて見直しを行うことで、一貫した指導ができていく。②「さわの里モラル」に関しては、より徹底するために協議を重ね、次年度につなげた。③会議後の「児童理解」の時間は効果的で「指導の具体」の共有につながっている。	B	児童生徒指導	①教職員間で「さわの里小学校リーフレット」を共有し、ぶれない指導を行う。②新「さわの里モラル」と毎月の生活目標を関連付けた指導を行う。③毎月、全教職員で児童理解するための機会を設け、「児童理解」の時間は効果的で、指導の具体を検討し、全教職員で指導を行う。	①教職員間で「さわの里小学校リーフレット」の共有、教室掲示等、全員でぶれない指導を行った。②新「さわの里モラル」と月の生活目標を関連付け、朝会では、生活目標の取り組みの発表を行った。③職員会議で、全教職員で児童理解するための機会を設け、児童の実態把握に努め、指導の具体を検討し、全教職員で指導を行った。	B	児童生徒指導			
地域連携	①「学力向上」や「健康」「安全」に向けて、家庭でできることを伝え、連携していく。②地域清掃・地域防災訓練など学校が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。③保護者の学校教育への関心を高めるため、具体的な内容で、発信していく。	①③学校便りや学年だよりを通じて、様々な情報を発信した。さわらち学習コーナーでは、時程を見直し、児童がより集中して取り組めるよう環境を整えた。②地域コーディネーターを中心に協働本部と連携をはかりながら、地域清掃やさわ小フェスタを行った。	A	地域連携	①さわらち学習コーナーや地域清掃で地域協働本部と連携し、地域に根差した学校教育を目指す。②地域とのつながりを大切にし、学習活動に取り入れる。(岡本農園、陶芸教室他)③異校種間のつながりを大切にし、児童が主体的に関わり合えるような取り組みを行う。(幼保小、小中、小高)	①地域とのかかわりが制限される中、児童が地域に関心をもつことをねらいとして、地域清掃を行った。②2・3年生の岡本農園との関わりや他、支援隊の方にもご協力いただいて学習活動を行った。③感染症対策とりながら、幼保小の活動を行った。小高、小中の活動は中止となった。	B	地域連携			
カリキュラム・マネジメント	①学年暦を更新していくことを通して、日々の実践を生かし教育効果が発揮できるようにしたカリキュラム・マネジメントを行う。②重点研究を通して、新学習指導要領に向かう「資質・能力」を育成するため、児童の姿を捉えたり、どのような授業をしていくか研究する。	①学年暦を更新していくことを通して、日々の実践を生かし教育効果が発揮できるようにしたカリキュラム・マネジメントを行った。②重点研究では、指導案や授業の組み立ては新学習指導要領を意識して研究することを全体で共有し、研究をした。	A	カリキュラム・マネジメント	①新学習指導要領に基づき更新された学年暦をもとに「資質・能力」を育成することを大切にした教育活動を目指し、カリキュラム・マネジメントを行う。②重点研や国研での研究を通して、児童の実態をとらえ、授業後の目指すべき児童の姿を明確にした授業づくり・授業実践を行っていく。	①新学習指導要領に基づき更新された学年暦を基に「資質・能力」を育成することを大切にした教育活動を目指しカリキュラム・マネジメントを行った。②重点研や国研での研究を通して児童の実態をとらえ、授業後の目指すべき児童の姿を明確にした授業づくり・授業実践を行った。	A	カリキュラム・マネジメント			
学習評価	①信頼性・妥当性のある評価のあり方、今後の新学習指導要領の三観点の評価について教職員間で研修する。②学習評価を行う際には、単元や題材のまとまりを見直し、学習の過程や成果を評価していくことが重要であることを認識していく。	令和2年度から実施される新学習指導要領の新観点「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」についての評価の在り方を方向性や考え方について、重点研や講師を招請しての講演、情報交換会などを通し研修することで共有した。	B	学習評価	①信頼性・妥当性のある評価の在り方、新学習指導要領に示された三観点の評価について、校内の研究・研修を行う。②学習評価を行う際には、単元や題材の学習を見通して、その過程や成果を評価していくことの重要性を認識する。	①評価に関する研修を行い、新学習指導要領に即した三観点での評価の仕方について学び、信頼性・妥当性のある評価の仕方につなげることができた。②単元や題材を見直し、作成し直した評価規準をもとに、児童の学習の過程を評価することを心がけることができた。	B	学習評価			
いじめへの対応	①いじめを許さない、見過ごさない雰囲気づくりに努める。②児童の自己有用感を高め、自尊心を育む教育活動を推進する。③「いじめはどの学校でも、どの児童にも起こりうるもの」の基本認識で、職員が児童の観察を丁寧に行い、小さな変化を見逃さない鋭い感覚を身に付けておく。	全職員が学校いじめ防止対策委員会に参加し、変化を見逃さない鋭い感覚を身に付けられるようにした。発見した際には迅速に適切な対応を行った。また、未然防止に努め、学級や学校の雰囲気づくりを行い、児童が安全に安心して学校生活を送れるようにした。	B	いじめへの対応	①いじめの未然防止に向けて、いじめを許さない雰囲気づくりを学校全体で行う。②いじめの早期発見に向けて、研修等を通して全教職員がいじめを見逃さない感覚を身に付けられるようにする。③いじめが疑われる場合は迅速に適切な対応を行う。	毎月、全教職員参加の学校いじめ防止対策委員会を開催し、①いじめの未然防止に向けて、いじめを許さない雰囲気づくりを学校全体で行い、②いじめの早期発見に向けて、研修等を行い、全教職員がいじめを見逃さない感覚を身に付けられるようにした。③いじめが疑われる場合は迅速に対応を行った。	A	いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンバーを中心に、課題を出し、共有化し、解決に向け具体案を出すことで、5年目以下の経験者の授業力向上を図る。②企画会・職員会議資料を学年・ブロックリーダー、教務、管理職による企画会一職員会議と全体で提案事項を練る機会を設け情報の共有化を図る。③グループウェアを活用や「電子申請システム」を活用して事務の簡便化、	①4月にそれぞれが課題に思っていることを出し合い、それに沿って計画を立てた。研究授業の指導案を検討した。オプザバの指導も受けた。②提案内容の向上をねらい、企画会からの検討し、よりきめ細やかな検討を重ねた。③ペーパーレスを推進し、効率化に加え、環境への配慮も推進した。	A	人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンバーを中心に、課題を出し、共有化し、解決に向け具体案を出すことで、5年目以下の経験者の授業力向上を図る。②企画会・職員会議資料のペーパーレス化を推進し、グループウェアを活用や「電子申請システム」を活用して事務の簡便化、効率化を図り、働き方改革につなげる。③LINEWORKSを活用して業務も推進していく。	①4月に学びたいことを出し合い、計画に沿って活動を行った。児童指導についても具体的な対応を話し合い教師力向上を図った。②ペーパーレス化を推進し、いつでも確認できる体制を整えた。③休業中もLINEWORKSの活用で業務を推進する組織づくりをした。またZoomの積極的に活用し、「つながる」学校教育活動を継続した。	A	人材育成・組織運営(働き方改革)			
ブロック内評価後の気付き	年度初めから、小学校・中学校との連携がよくなされているという実感がもてた。本年度の重点に掲げているとおり、「基本的な生活習慣」の確立と授業をつなげる「連続性のある学習指導の推進を目指すために、小中一貫教育授業交流会での各学校の資料を元にした情報交換はとても役に立った。各学校のきまりや持ち物の約束等を共通理解がなされることで、中学校での学校生活のスタートがより円滑になり、小中一貫教育が実現できると考えられる。浜中学校から授業参観に来られた先生方も、児童と率先して関わってくださり、児童がもつ不安や疑問にも丁寧に答えたいいただき、ありがたかった。			ブロック内評価後の気付き	コロナ禍ということで、小中連携のブロック職員交流、児童生徒交流日等、年間計画で立案されていたものは実施は困難であった。できることを考え、各中学校生徒会作成の資料やパワーポイントなどを6年生に示し、中学校への期待を膨らませたり、不安を和らげたりする一助とする活動を行った。また、中学校職員との情報交換や授業の参観を、感染拡大防止対策を行いながら実施し、さわの里小の児童の今を共有することができた。さらに、昨年度末に計画した「自分づくり・パスポート」のブロック取組を進め、次への改善を図りながら実践していった。できることを試行錯誤した1年間の取組となった。		ブロック内評価後の気付き				
学校関係者評価	人との関わりを大切に活動や体験的な活動の充実を図っていることが感じられる。たのびのつながりがとてもよい。人とのつながりがあることは人としての育ちが大きい。親が家庭での学習にもっと関心をもてるとよいのではないかと。全校児童の前で具体的な説明や理由を加えながら、積極的に関わり合いの言葉で話すことができる子どもの姿や、人から学ぼうとする意欲的な姿など、様々なよい姿を発信していくことを今後も続けていくことで親も変わり、家庭の教育力も高まり、学力向上につながると考える。			学校関係者評価	コロナ禍の影響を受け「感染症予防策」が優先された。児童が最大限に学習内容を習得できる授業づくりや、安心安全な学習環境づくりを目指してきた。今後児童につけていきたい力に「読み取る力」があり、文字で表現された情報だけでなく、広くは社会に存在するさまざまな情報を「読み取る」力であり、その力は人との関係づくり「絆」づくりにとって必要である。また、教師は子どもの表情や様子をつかみ、発言やつぶやき、ノート記録やふりかえりから、授業改善していき、「分かる」授業づくりを今後も目指していく。子どもたちが「学校に行くことが楽しい。」と思える学校づくり、授業づくりを引き続き目指していく。		学校関係者評価				
中期取組目標振り返り	今年度より新学習指導要領でスタートした。「すすんで学び 笑顔がやぐ さわの里へやり抜く力」を育てます～」のもと、様々な活動・学習場面で、教職員も児童も新学習指導要領に向かい進んできた。本校の喫緊の課題である「学力向上」に向け、ふり返りを充実させた学習展開を充実させたり、なかよし活動を通して人とのつながりをより深めたりしながら、取組を推進した。また、新学習指導要領全面実施に向けて「カリキュラム・マネジメント」「学習評価」「学習指導要領」等を検討しながら、教職員の共通理解した。次年度も、今年度のよさを伸ばし、課題を乗り越える本校の取組を推進していきたい。			中期取組目標振り返り	新学習指導要領に基づいた学年暦をもとに「資質・能力」を育成することを大切にした教育活動を目指すとともに、児童の実態をとらえ、目指すべき児童の姿を明確にした授業改善に取り組んだ。評価に関しては研修を行い、単元や題材を見直し、作成し直した評価規準をもとに学習の過程を評価することに取り組んだ。なかよし班活動を行うことは困難であったが、zoomを使用して班のメンバーのつながりを培った。いじめを許さない学校の風土づくりと教職員の人間権意識に磨きかける取組は次年度も継続する。		中期取組目標振り返り				